

きのこ歳時記5 ―戦後の俳句より―

今野 英山

戦後の俳句の特徴は価値観の多様性にあるのではないだろうか。戦前にも伝統的な価値観から脱却しようという新興俳句の動きがあったものの、戦時体制の中で弾圧されていた。それが敗戦によって再び芽を吹き出すことになる。また、アメリカ文化という新たな価値観が加わり、「第二芸術論」等の批判と内省の中で変容していくのである。

さて、茸を詠んだ俳句は、戦前までは江戸時代からの伝統である松茸狩りと呼んだものが圧倒的に多かった。そこにせいぜい椎茸、初茸、シメジ、キクラゲ、月夜茸、松露などが加わり、まれにホコリタケやクリタケなどが詠まれていたに過ぎない。

戦後の茸の俳句を見ると、まず茸の種類が庶民的な雑茸に広がっているのがわかる。ナメコ、マイタケ、ベニタケ、ホウキタケ、テングタケ、サクラシメジ、サルノコシカケ等々である。詠む主題も、いわゆる「花鳥諷詠」の世界から「社会詠」や芭蕉の頃には主流だった「諧謔味」の復活など多様化している。

ここでは、特に戦後になって詠まれてきた茸の句を中心に取り上げてみたい。

〔ナメコ〕

白樺の雫あはれになめこ売 (桂樟蹊子)

白樺林の脇の露店だろうか。雨上がりの雫が白樺の葉から垂れている中、もんぺ姿でナメコを売る老婆に風情を見た、と勝手に想像する。

霧さむき月山なめこ食ひ惜しむ (加藤楸邨)

月山はナメコの産地として有名である。そろそろ寒気が身に凍みる頃にナメコの味わいが一段と深くなる。

なめこ搔林中の声四重唱 (殿村菟絲子)

林の中で原木栽培しているナメコを、女四人が世間話などをしてながら収穫しているのであるうか。「林中の声」というのがすごい。

昏きよりなめこを掴む女の手 (野沢節子)

これもまた原木栽培ナメコを朝暗いうちから収穫しているようだ。しかも妙になまめかしいではないか。

〔マイタケ〕

生きている舞茸提げて来たりけり (加藤知世子)

マイタケを採った時の弾むような様子がよく出た句。

舞茸の舞の終ひは見しことなし (斎藤美規)

作者の庭に毎年はえてくるのだそうである。日に日に変わる形の変化を楽しんでいるが、結局は食べてしまうので最後の様子までは見たことがないという意味だろう。

舞茸をひっぱり出せば籠は空ら (中田みづほ)
舞茸をかかへて転げ落ちたると (矢島渚男)
両句ともうらやましい限り。

〔ベニタケ〕

疲れゐて雨の紅茸傘で刺す (加藤秋邨)
星影や紅茸を踏み消したれば (永田耕衣)
ベニタケを見るとつい蹴ったり踏んだりしたくなるのは私だけではないようだ。雨の日とか星の光の下とか、幻覚に襲われやすい時には特に。

楊貴妃の匂ひ袋が紅茸 (田中水桜)

玄宗が楊貴妃の墓を改墓しようと掘り起こしたところ、楊貴妃の死体はもぬけの空で、ただ匂ひ袋だけが残されていたという。紅茸との連想が面白い。

紅茸を怖れてわれを怖れずや (西東三鬼)

ベニタケを見て女は「怖い」とすがって来たのか。

紅茸や人と別れし眼裏に (加藤知世子)

めらめらと燃える炎のごとくか。

紅茸の国へ踏みこむ女靴 (井桁白陶)

紅き茸礼賛しては蹴る女 (八木三日女)

怪しくも美しいベニタケの世界。そこに真つ赤な女の靴が・

〔テングタケ〕

鍵をかけ忘れていたり天狗茸 (五島高資)

テングタケはベニタケ以上に幻想的な茸である。しかもその圧倒的な存在感から、さまざまな物語性を持ちうる。夜中に押し入ってくる妄想を抱いても少しもおかしくはない。

夜は天狗茸と語るか石仏 (鷹羽狩行)
童話のような世界である。子供でなくとも納得できるような気がする。

候補者のこだまを笑ふ天狗茸 (北原昭子)

選挙運動も戦後は津々浦々まで。皮肉もたつぷり。

毒茸の饒舌の色尽しけり (橋本栄治)

これはベニテングタケに違いない。それとも、ある種の人物に対する比喩なのか。

〔毒茸〕

笑ひ茸蹴とばし山が怖くなる (秋沢猛)

笑ひ茸食べて笑つてみたきかな (鈴木真砂女)

毒茸の蹴られ踏まれてへつらへる (鷹羽狩行)

崩れつつ毒茸色をつくしけり (三嶋隆英)

毒茸の虚飾を蹴りて他愛なし (高萩篠生)

これらの句もベニテングタケだろうか。その色彩ゆえに怖いイメージやしたたかなイメージがある。そして比喩的に詠まれやすい茸である。

〔ツキヨタケ〕

月夜茸今宵はねむる瀧の雨 (堀口星眠)

同じ毒茸でもツキヨタケは夜の主役である。その主役も雨の晩は光ることなく眠る。

宝刀の眠れる村の月夜茸 (土肥あき子)

鬼を切ったか妖怪を切ったか。伝説の村を月夜の晩に眼下に見る。

蛾の翅の朝はしずかに月夜茸 (小林黒石礁)

貂達に夜夜燃ゆるなり月夜茸 (小林黒石礁)

夜活躍する動物たちを常に見守っているのはツキヨタケのみ。

毒茸月薄眼して見てゐたり (飯田龍太)

ツキヨタケがかすかに光るのを三日月が見守つてゐる。

〔梅雨茸〕

梅雨茸を踏みし不吉のにほふなり (桂樟蹊子)

黄昏の梅雨茸の怪に憑かれけり (岡安迷子)

梅雨茸や勤辞めては妻子飢ゆ (安住敦)

梅雨茸とは何か。あるホームページにはクヌギ茸、アセ茸、ベニ茸、ホコリ茸などの各属の茸を示しているようだ、と書いてある。やや陰気で不吉なイメージを背負っている。

わたくしに劣るものなく梅雨きのこ (池田澄子)

梅雨茸のように、世の中に自分より下のものはないだろう、これは作者の自嘲の句である。

梅雨茸を蹴りころがして誕生日 (赤城さかえ)

そんな陰気な茸を蹴飛ばして、少しは新しい自分になりたいと思う。

〔キクラゲ〕

木耳や森の奥まで雨の音 (小島健)

キクラゲは、陰気というよりは奥深い湿気を内包する茸である。

木耳に飢遠くも来つるかな (山口草堂)

また木耳という字づらから、遠いところから耳をそばだてているイメージもある。

木耳や母の遺せし裁鋏 (秋元不死男)

亡き母が鋏を使って料理をしていたことを思い出したか。

その他、なじみの深い茸についての句をかいつまんで紹介してみよう。

〔サクラシメジ〕

帰りつくころ色失せむ桜茸 (朝倉和江)

出会った直後の感激が少しづつあせてくるのは、なにもサクラシメジに限らない。

〔ホウキタケ〕

鼠茸と聞いて月夜となりゆけり (森澄雄)

ホウキタケのことをネズミタケという地方が多いようだ。

〔クリタケ〕

栗茸の朽葉の匂ひあわれまる (千代田葛彦)

晩秋の風情を、クリタケほど端的に表す茸はない。

〔ナラタケ〕

ざるいっぱいの櫛茸抱き父帰る (新海あぐり)

山育ちの子供にとつてのはるかなる記憶。

〔エノキタケ〕

雪割茸男の大きな手を濡らす (殿村菟絲子)

手袋を脱いで、男が素手で雪の中から取り出したエノキタケのかたまり。

〔ムキタケ〕

片羽茸林道濡れて音もなし (平松弥栄子)

たつぷりと水分を含んだムキタケが目には浮かぶ。

〔マツタケ〕

松茸の今日が底値とすすめられ (稲畑汀子)

松茸を探し滑ってばかりいる (江川虹村)

茸の代表マツタケの句は今も健在である。一喜一憂する状況は変わっていないようだ。

〔茸狩〕

いつせいにきのこ隠るる茸狩 (鷹羽狩行)

私を待っているはずの茸が見当たらない。一体どこに隠れてしまったのか。

ひそひそと茸の山となつてゐし (矢島渚男)

茸山の香を持帰り妻を抱く (丘本風彦)

秘密めいたところが茸狩りの魅力なのだ。これは昔も今も変わらないだろう。

次回からは短歌や狂歌などに詠まれた茸を紹介したい。
まずは万葉集から始まって江戸時代までを紹介する予定。



クリタケ 入傘山にて撮影